令和６年度

江南市小学生
平和教育研修派遣報告書

令和６年８月５日～６日　広島

江南市教育委員会

もくじ

1	はじめに	団長　水野三佳	1
2	平和教育研修派遣団員名簿		1
3	日程表		2
4	感想レポート		
	「一瞬で奪われた広島の日常」	滝　広貴	3
	「平和記念資料館を訪れて戦争について考える」	髙木　大和	3
	「被爆した子の歴史」	松永　佳樹	4
	「原爆ドーム　～原子爆弾の恐ろしさを伝える」	笹田　結衣	4
	「実際の原爆ドーム」	西尾　龍之介	5
	「７９年前の日常」	綿貫　希音	5
	「平和のために語り継ぐ」	武田　雄成	6
	「平和をつくる『平和への誓い』」	佐藤　琥羽	6
	「“願うだけではおとずれない”平和」	金丸　依央	7
	「神と工夫の島　宮島」	武田　咲耶	7
	「８月６日に何を考えるか。」	土田　愛子	8
	「二度と戦争が起こらないようにするために」	太田　咲良	8
	「想いをつなぐ」	岩田　悠生	9
5	おわりに	副団長　仙田尚宏	9

は　じ　め　に

８月５日、私たちが広島で見聞きしたことは、想像していたものよりはるかに悲しく辛いものばかりでした。原爆資料館では、見学をするうちにだんだん言葉を失いました。言葉では表すことができなくなりました。79 年前もきっと暑く、太陽が照り付ける青空やセミの鳴き声に、戦時下ではありますが、明日も日々の営みが繰り返されるに違いないという思いがあったことでしょう。

８月６日に参加した平和記念式典でこども代表のお二人が平和への誓いの最後に「さあ、ヒロシマを共に学び、感じましょう。平和記念資料館を見学し、被爆者の言葉に触れてください。そして、家族や友達と平和の尊さや命の重みについて語り合いましょう。」と呼びかけました。

研修に参加した団員のみなさんには、ぜひ自分の言葉で、研修での学びを伝え、世界を変える平和への一歩を踏み出してほしいと思います。前述したように、きっと言葉では言い尽くせないものもありますが、自分の思いや感じたことを伝えていきましょう。

今回の派遣に際し、13 名の団員はもちろん、引率者の３名も貴重な体験をさせていただくことができました。ご尽力いただいた江南市・江南市教育委員会をはじめとする関係機関の皆様、団員を支えてくださった保護者の皆様や学校関係者の皆様、ありがとうございました。

令和６年８月　　団　長　　水　野　三　佳

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

平和教育研修派遣団員名簿

団　長	古知野南小学校	校　長	水　野　三　佳		
副団長	古知野南小学校	教　諭	仙　田　尚　宏		
養護教諭	古知野東小学校	養護教諭	黒　岩　知　里		
団　員	古知野東小学校	笹　田　結　衣		古知野東小学校	滝　　広　貴
	古知野西小学校	武　田　雄　成		古知野南小学校	金　丸　依　央
	古知野南小学校	土　田　愛　子		古知野北小学校	綿　貫　希　音
	布袋小学校	武　田　咲　耶		布袋小学校	西　尾　龍之介
	布袋北小学校	太　田　咲　良		宮田小学校	佐　藤　琥　羽
	草井小学校	髙　木　大　和		藤里小学校	松　永　佳　樹
	門弟山小学校	岩　田　悠　生			

日　程　表

８月５日(月)　研修１日目

時　　刻	交通機関	行　　程
７：１５		市役所正面玄関集合
７：２０		出発式
８：０４	名古屋鉄道	名鉄名古屋駅へ
８：５８	新 幹 線	のぞみ１０９号　：　広島駅へ
		昼食　車内弁当
１２：１９	広島電鉄	原爆ドーム前駅へ
１２：３０	徒　　歩	平和記念公園内見学　ガイド：西川さん 原爆の子の像にて折り鶴奉納 原爆ドーム、原爆供養塔、平和の鐘などを見学 平和記念資料館見学
１６：００	徒　　歩	おりづるタワーにて被爆者体験講話 講　師：桑本　かつこ　さん
１８：４５	広島電鉄	広島駅へ
１９：１５	徒　　歩	夕食　ひろしまお好み物語「きゃべつ」
２０：１５		ホテル着、打合せ会
２１：３０		消灯

８月６日(火)　研修２日目

時　　刻	交通機関	行　　程
５：３０		起床
６：００		朝食
６：５０	タクシー	平和記念公園へ
８：００		広島市原爆死没者慰霊式並びに平和記念式に参列
９：１５	広島電鉄	西広島駅へ
９：５８	ＪＲ	宮島口駅へ
１０：４０	ＪＲ西日本フェリー	宮島港へ
１０：５０	徒　　歩	宮島・厳島神社にて見学
１２：００		昼食　鳥居屋
１４：０５	ＪＲ西日本フェリー	宮島口へ
１４：３４	ＪＲ	広島駅へ
１５：４３	新 幹 線	のぞみ３８号　：　名古屋駅へ
１８：１０	名古屋鉄道	江南駅へ
１８：４０	徒　　歩	駅前用地にて帰着式
１９：００		解散

「一瞬で奪われた広島の日常」

古知野東小学校　　滝　広貴

平和記念資料館には、人影の石、原爆で亡くなった人の持ち物、佐々木禎子さんについてなど様々な展示がありました。その中でも一番印象に残っているのが、被爆前と後の広島です。被爆前の広島には、たくさんの家やお店がありました。商店街は人でにぎわい、活気であふれていました。また、学校では普通に授業が行われていました。今の私達のような、普通の生活が広島にあったのです。しかし、たった一発の原子爆弾で、活気であふれていた街は焼け、建物は壊れてがれきになり、木は枯れ果ててしまいました。また、無差別に多くの人々の命を奪い、生き残った人の人生も変えてしまいました。ついさっきまで日常の生活があったのに、それが一瞬で奪われてしまったことに、僕は衝撃を受けました。

日常が奪われてしまった広島のようなことは、二度と繰り返してはいけないと思いました。そのためには、原爆の悲惨さや平和の尊さを伝えていかなければならないと思いました。

原爆投下前

原爆投下後

「平和記念資料館を訪れて戦争について考える」

草井小学校　　髙木　大和

平和記念資料館では、原爆が落とされた時の様子を描いた絵や被爆者の遺品などが数多く展示されていました。僕が特に心に残っているのは、高熱火災という、右の絵です。この絵は、激しい炎が街と人々を飲み込み、一日中燃え続けたという場面です。倒れた建物の下敷きとなった人々の多くが、這い出ることもできず、生きたまま炎に焼かれた様子が描かれています。僕は、この絵のような悲惨な出来事が広島のいろいろな場所で起きていたことを知り、胸がつまりました。

この悲惨な原爆が落とされたあとの広島の様子を知ってもらい、戦争はただ人を悲しませるだけだということを伝えなくてはいけないと思いました。

「被爆した佐々木禎子さんについて」

藤里小学校　　松永　佳樹

現地のガイドさんから、原爆の子の像のモデルになっている佐々木禎子さんの話を聞きました。禎子さんは、1945 年、２歳の時に被爆しました。爆風で屋外に飛ばされましたが、やけどや傷などは負わず、お母さんに背負われて避難したそうです。その際、放射能を含んだ黒い雨に打たれました。家は全焼してしまっていたので、親類の家に身を寄せ、被爆の混乱や物不足に苦しみながらも再建するために努力しました。新たに市内に理髪店を開き、少しずつ落ち着きを取り戻してきました。そして禎子さんは元気に育ち、幟町小学校に入学しました。６年生の頃は、かけっこでは誰にも負けなかったそうです。将来の夢は中学校の体育の先生でした。しかし、６年生の９月頃から顔色が悪くなり始めたので、病院をまわって詳しく検査してもらうと白血病ということが分かり、入院しました。卒業証書を受け取り、中学校に進学したものの、通うことはできませんでした。８月３日には、名古屋から色とりどりの折り鶴が送られてきました。体調が悪化していく中でも禎子さんは、「病気が治りますように」と願いながら折り鶴を折りました。しかし、10 月 25 日に家族が見守る中で亡くなりました。

「原爆ドーム　～原子爆弾の恐ろしさを伝える」

古知野東小学校　　笹田　結衣

原爆ドームは元々「広島物産陳列館」というにぎわいのある場所だったそうです。1945 年８月６日、午前８時 15 分に落ちた原子爆弾によって、爆心地から 170 メートルに位置していた燃料会館では、職員のほとんどが命を落としました。ただ１人、当日、その時間に地下室に資料を取りに行っていた人だけが助かったということが、現地のガイドの方の話から分かりました。

戦後、物産陳列館は、市民から原爆ドームと呼ばれるようになりました。原爆ドームは、核兵器が使用されたことの悲惨さを伝えるため、世界遺産に登録されました。数千度にも及ぶ熱風に耐え、原爆ドームは核兵器の恐ろしさや、戦争の恐ろしさを今日まで伝えてきたのです。

一瞬にしてにぎやかだった場所を失ってしまう原子爆弾はとても恐ろしいものだと思います。原爆ドームはその恐ろしさを伝えるためだと、見て感じました。一人一人が幸せを願うことが世界恒久平和への第一歩だと思います。

「実際の原爆ドーム」

布袋小学校　　西尾　龍之介

僕は、原爆ドームを見る前はそれほど大きな建物だとは思いませんでした。ですが、実際は想像より遥かに大きく、とてもしっかりした建物だと感じました。

もともと「広島物産陳列館」として、県内外の物産品の収集や陳列、商工業に関する調査や相談などを行っていました。他にも、博覧会や美術展、講習会などの会場としても使われ、沢山の人々で賑わっていたそうです。爆心地からわずか 160 メートルだったこの場所は、館内で職員約 30 人が即死し、熱線で地表は 3,000～4,000 度に達したそうですが、衝撃波の方向、爆風が窓から吹き抜けたこと、ドームが銅板だったことなどから、建物の一部は崩壊を免れたと言われています。偶然が重なり残った建物は、今、戦争の恐ろしさと平和の尊さを物語る象徴として世界文化遺産に登録されています。

原爆が投下される前、そこは沢山の人々の生活の一部だったことを知りました。たった一つの爆弾で、大きな建物が一瞬で今のようになってしまったことを目の当たりにして、原爆の威力がとても恐ろしいものだと改めて感じました。

「79 年前の日常」

古知野北小学校　　綿貫　希音

「いつもお腹が空いていた。」これは、被爆体験講話でお話いただいた桑本さんの小さな頃の記憶です。

79 年前の８月６日、原子爆弾が落とされたことによって広島の日常が変わってしまいました。町は焼き尽くされ、原爆ドームを残し、後は何もなくなってしまいました。

桑本さんがその朝過ごしていた学校も、爆風で窓ガラスがすべて割れてしまったそうです。１年生だった桑本さんは、３日後に親戚と一緒にお母さんを探しに町に行き、そこで見たものは町中に転がる死体や、川に浮かんだ人達だと聞きました。

私達は今、会いたい時に友だちと会って楽しく過ごし、お腹が空いたら美味しいご飯を食べることができます。今の平和な日常からは想像もつかないような話に、改めて原爆の悲惨さについて世界中の人に伝えていかなければいけないと思いました。

残念ながら、今も戦争が起きている国もあります。誰も悲しい思いをしなくてもいいような世界になるよう、一人一人が平和について考えることができたら、みんなが笑顔で暮らせるようになると思いました。

「平和のために語り継ぐ」

古知野西小学校　　武田　雄成

被爆体験の話をしてくださった桑本さんは、戦争中に家族と離れ離れで過ごさなければならず、悲しい思いをたくさんしてきたそうです。お母さんは市内で被爆し一命は取りとめたものの、その後、健康被害に苦しんだと聞きました。

話の中で一番印象に残ったことは、原爆による即死は免れ、生き延びた方たちの中にも、放射線を浴びたことにより、症状が少しずつ出て、苦しみながら亡くなっていった方がいたことです。なんとか生き延びて、希望が見えても、また苦しまないといけない日が訪れるなんて、辛くてしかたありません。被爆者の話を実際に聞かないと分からない本当の悲しさや気持ち、生々しい体験などから、戦争の恐ろしさを実感することができました。

とても大変な思いをした人々がたくさんいたことを忘れることのないように、身近な人に原爆や戦争の悲惨さ、平和の大切さを伝えていきたいです。そして今ある幸せや平和を守っていくために自分にできることを考えて行動していきたいです。

「平和をつくる『平和への誓い』」

宮田小学校　　佐藤　琥羽

私は、広島平和記念式典でこども代表の平和への誓いを聞きました。このような式典で、同じ国に住んでいる同級生が話す姿を見て式典が少し身近に感じられただけでなく、戦争をどこか他人事のように感じていた私に、子供にもできることがあるのだと、考えさせてくれました。特に、「願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」という言葉を聞いて、なにか自分にできることはないかと考えました。そのうちの一つが戦争、原爆のむごさや恐ろしさを沢山の人に知ってもらうことです。一人がどんなに強く願って行動しても、後に続く人がいなければ、できることにも限りがあります。だから、まず、多くの人に 79 年前の広島を知ってもらうこと。自分たちにもできることはあるのだということを感じてもらうこと。これらを通して平和について考え、行動にうつす人が増えたらいいなと思います。そして、私自身も広島平和派遣で学んだことを活かして、平和のために行動できる人になりたいです。

「“願うだけではおとずれない”平和」

古知野南小学校　　金丸 依央

私は平和記念式典に参加して強く思ったことがあります。それは、「思ったこと、感じたことを行動に移すことの大切さ」です。戦争の悲惨さについては、教科書やテレビで見聞きすることも多く、分かったつもりでした。しかしその先のことは、戦争の悲惨さに比べて、何をしたらよいのか、ぼんやりしていました。いつか大人になった時に考えれば十分だと思い、この状態に危機感を感じていませんでした。しかし、静かでピリッとした式典でさまざまな代表の言葉を聞き、私達にも、平和について今すぐにでもできることがあるのではと感じました。子供代表の、「願いだけでは平和はおとずれない。今すぐできることとして、一人ひとりが相手の話をよく聞くこと。違いを良さと捉え自分の考えを見直すこと。仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。」という言葉は、どれも具体的ですぐにでも行動に移せそうなことでした。

この式典での言葉をはじめ、今回の研修で感じた自分の想いを家族や友達にたくさん伝え、相手の意見をしっかり聞いてみようと思います。

「神と工夫の島　宮島」

布袋小学校　　武田　咲耶

この写真の大鳥居で有名な宮島は、神の島と呼ばれていたそうです。それは昔、島自体が神として信仰されており、人の立ち入りが禁止されているほど神聖な場所だったからです。そこにはアマテラスオオミカミの子供のイチキシマヒメノミコト、タゴリヒメノミコト、タギツヒメノミコトが祀られています。

私が一番驚いたのは、厳島神社大鳥居が“自重で”立っているということです。その秘密は大鳥居の上の部分の笠木と島木の間に空間を作り、そこに約４ｔの小石を詰めた重さと柱の重さで約 60t となり、自重だけで波や台風などでも倒れなくなる工夫があるからです。その奥にある社殿には床に浸水対策があります。木材は釘付けされておらず、そこに少しずつ隙間があります。台風や高潮のときに海水が床上まで来たとき、海水を逃がすためです。その他にも社殿が壊れることを想定し、壊れやすい部分を作ることで、一気に崩壊することを防いでいると知りました。これらの仕組みは平清盛が考えていたとされています。清盛のこだわった工夫が今のきれいな宮島につながっています。

「８月６日に何を考えるか。」

古知野南小学校　　土田　愛子

研修に参加し心に残っていることは２つあります。

１つ目は、被爆者の話です。放射線の影響で顔が青くなったり、原爆には輸血がいいという噂が広まったりして、母親を助けるため必死に輸血した話など被爆者しか話せない、真実の話が聞けたからです。

２つ目は、平和記念資料館です。

後遺症で苦しむ人々の写真を見て、「もっと生きたい」、「二度と原爆は落ちないでほしい」という声が聞こえた気がし、原爆の憎しみを改めて感じました。

資料館には原爆のことを知ろうと沢山の人が資料館に来ていました。小学校低学年の子が目を背けず真剣に展示物を見ていたことに私はとても驚きました。

外には、ボランティアの人や私達と同じように遠くの県から来ている小中学生、修学旅行生など様々な年代の人がいました。更に、外国人の方も多く８月６日は世界中の人が平和について考える日だということがよく分かりました。

「二度と戦争が起こらないようにするために」

布袋北小学校　　太田　咲良

平和教育派遣に参加して戦争や原爆の悲惨さがとても感じられました。実際に原爆の被害を見たり、聞いたりして戦争についての知識をとても深める事ができました。

特に、平和記念公園にある原爆の子の像が印象的でした。原爆の子の像は、１２歳というとても短い人生を送った佐々木禎子さんがきっかけとなっており、病気を治したいという思いで千羽鶴を折り続けていたことが世界各地に広まり、今では千羽鶴は平和の象徴になっています。禎子さんがきっかけとなった原爆の子の像は、原爆で亡くなった多くの子供たちを慰め、世界に平和を呼びかけるために建てられました。改めて戦争は、してはいけないことだと思ったし、戦争がない平和な世界になってほしいと思いました。

平和教育派遣に参加し、もう二度と戦争が起こらないように戦争や原爆の悲惨さをもっとたくさんの人々に伝えていく必要があると思いました。

「想いをつなぐ」

門弟山小学校　　岩田　悠生

平和教育研修で平和の尊さなどを学び、戦争の悲惨さを忘れないために知っている人が知らない人に伝えていく必要があると感じました。なぜなら、同じような被害を繰り返さないためです。そう思ったのは、平和記念資料館の「亡くなった生徒たち」という展示が印象に残ったからです。多くの子供達などの命が無差別に一瞬で奪われたということから、もう二度とこのような被害を繰り返してはいけないと思いました。

また、平和記念式典に出席して広島市の小学６年生の人が発表した「平和への誓い」を聞き、平和への誓いを 30 年近く続けていることを知り、広島の人々の平和への思いを感じることができたからです。

これらの貴重な体験ができた平和教育研修で学んだ戦争の悲惨さなどを忘れずに、戦争で悲しむ人が一人でも少なくなるように、僕も積極的に周りに伝えていきたいです。

お　わ　り　に

「言葉にして伝えられる研修にしよう」という目標を掲げ、子どもたちは今回の研修に臨みました。平和記念資料館の見学や平和記念式典への参列などを通じて、広島で感じた被爆の実相や平和の大切さ、悲しみや怒り、祈りなどを常に書き留める姿、互いに語り合う子どもたちの姿が見られました。時代の流れとともに AI が進歩し、当時の広島様子を伝える写真のカラー化も進んでいます。当時を一層身近に感じられるようになる一方、戦争を生身で味わったこととして語り継げる人が少なくなっていることを意味します。子どもたちは、現地で見たこと、被爆者をはじめとする平和を願う広島の方々の記憶や思いを、言葉として伝えていくことの意味や重要性を改めて感じ、平和の尊さや命の重みについて考える機会となりました。

『願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。一人一人が相手の話をよく聞くこと。「違い」を「良さ」と捉え、自分の考えを見直すこと。仲間と協力し、一つのことを成し遂げること。私たちにもできる平和への一歩です。』式典において、こども代表が「平和への誓い」で語った言葉の一節です。

世界から核兵器が廃絶され、世界が平和になる日まで燃え続ける「平和の灯」を、一日も早く消すため、団員 13 名にとって、仲間とともに考え、自分にできることを探すきっかけになった研修だったと思います。

このような貴重な機会を与えていただきありがとうございました。

令和６年８月　副団長　仙田　尚宏